

「消化器内視鏡用語集」

日本消化器内視鏡学会用語委員会 編集

北里大学東病院・消化器疾患治療センター長、北里大学教授

比 企 能 樹

内視鏡に関する論文を記述するとき、あるいはこれを学会において報告するとき、しばしば正確な用語を探すのに苦労することが少なくない。殊に内視鏡的な解剖学的名称があってもよいはずなのに、今まではそれが定まっておらず、人によってその表現はまちまちであった。

X線診断学にしても、外科学にしても、殊に手術治療学においても、各々の用途に適した解剖学的な名称が存在する。またそれによって、一段とその学問体系が進歩、発展してきたことは歴史的にみても明らかな事実である。

いまや内視鏡学が世界的に発展した現在、国際的な対応に耐えうる用語の取り決めが是非とも必要になってきた。これは世界をリードする立場にある本邦の内視鏡学者によって、これを整備し、まとめてゆかねばならない宿命ともいえるべきものがあったと思う。

1981年春に日本消化器内視鏡学会用語委員会が編成されて以来、城所功委員長のもとに8年余の長時間をかけて、各部門の専門医を召集し

た小委員会による綿密、かつ精力的な作業が行われた。その結果に更に中央委員会による慎重な検討が加えられ、“消化器内視鏡用語”としてまとめ上げられたわけである (Gastroenterological Endoscopy 31(2): 523-582, 1989)。

この用語に関するまとめの基本姿勢は、城所委員長によれば以下のごとく述べられており、厳格なうちにも柔軟性を持たせた点が注目される。①内視鏡用語として必要不可欠のものを採択し、和文、欧文の論文作成に役立つものとする。②混乱の怖れのある用語については、より好ましい使い方を選ぶ。③日本語を基調とするが、これに対応する外国語は英語を基本とし、ドイツ語、ラテン語その他は慣用されているもののみとした。④現在普遍化されていない特定のグループのみで用いられている用語については、是々非々で採択し、註を加えた。⑤今回収録の用語は、あくまで固定したものでなく、今後も継続的に審議を重ね採択してゆく。

以上の結果、集大成された“消化

器内視鏡用語”の實際をわれわれは更に普遍化し徹底させる必要がある。

今回、医学書院から刊行された「消化器内視鏡用語集」は、日本消化器内視鏡学会用語委員会の編集によって作られたものであるが、特徴的なことは以下の2点に集約されると思う。すなわち、第1には用語で示された実際の所見が内視鏡的にどのようなものを意味しているのか、その代表的な所見をカラー図譜によって示されていることであり、第2には委員会における作業において、基本線を合わせることで最も苦心したと言われる OMED (Organization Mondiale d'Endoscopie Digestive) 用語集で、現在で作成中のデータベースに対応するコード番号の索引が付されていることで、このコードは今後のコンピューター処理のうえで必要不可欠なものになると考える。

今後この用語集を積極的に利用することにより、本邦の内視鏡の実力を更に一段と国際的に示しうるものと確信する。委員長が序に述べておられるとおり、“今後も継続的に審議を重ね、その時代の進歩に応じた適切な用語を選択してゆく”ためにも、これを広く使いこなすことによって、より建設的な意見を集積してゆくことができるような内視鏡医各位の努力が期待される。

A5判 176頁 1989年 送料300円
定価3,399円(税込) 医学書院 刊